

平成23年度第3回宮城県産業教育審議会 記録

○日 時 平成24年1月13日(金) 14:00~16:00

○会 場 県庁4階 特別会議室

○欠席者 宮城学院女子大学 教授 平本福子 委員
東北福祉大学 教授 塩村公子 委員

1 開 会

2 挨拶 宮城県教育委員会 教育次長

3 議 事 (1) 震災被害の大きい農業高校・水産系高校の再建について
(2) 震災の復興に向けた今後の専門学科・専門高校の在り方について
(3) その他

4 閉 会

議 事

(1) について事務局より説明

各委員よりの御意見・御質問はなかったので、中間答申は承認されたものとなった。

(2) について事務局より資料の見方説明、白石委員より専門委員会の意見に基づく最終答申素案の説明

(3) については特になし

審 議

橋本委員：大変良くまとまっていると感じている。専門高校から、必ずしもその分野の職業に就くという生徒ばかりではないということを念頭に入れた内容になっており好感を持っている。これまでにない新たな学科という点についても、必ずしも将来の職業だけを見つめた学科だけを視野に入れると言うことではなく、いろいろな形で職業教育の充実に向けた取組をしていただきたいと思います。

佐藤委員：3点ほど意見を申します。農業高校の現状という題がありますが、教員の育成強化について、厳しい情勢の中だからこそ新たないろいろなニーズに対応できる農業高校の教員の育成と確保が重要になります。技術的な指導も必要ですが、農業は生命産業でありますので、農業の大事さ、農業の重要性を語る教員の育成と確保が大切であります。7ページ2つめの○にある、既存の施設設備の活用、さらなる施設設備の充実とありますが、教育環境の充実についてはお金がかかると思うが、拠点校ということからも新しい実習施設など整備拡充をお願いしたいと思います。さらに、1つめの○にあります、地元企業との連携とありますが、具体的に農協などの農業団体との連携を地元で高校生が現場の実習ができる場があることは非常によいことですのでよろしくお願いま

す。

大泉会長：農業高校でも水産高校でも技術の教育は確かにありますが，社会環境を教える教育が弱いと思います。そうしたことから，審議会でもマーケティングなどを教えてほしいということもありましたし，教えられる先生がいらっしやるのかという話もありましたので，教員の指導力向上ということも必要であると思います。専門高校の一番重要な要素が，地域との関係であり，商工会議所，商工会，農業協同組合，漁業協同組合等の関係も文言上どのように入れていくかを検討していただきたいと思います。

船渡委員：国際的な視点から人を育てるところを強調して欲しいと思います。水産の世界では，衰退産業のような書き方をされていますが，世界的には決して衰退産業ではなく，グローバルな観点から見て国際人を育てるといった点が欲しいと思います。また，地域との関係では，沿岸部では地域の指導者，リーダーとなっている人は水産高校を出た人が中心となっていることが非常に多く，その方々がいて水産業が成り立っているという面があるので，その方々を活用したり，あるいは見本とした教育が必要であると思います。

大泉会長：ポイントにすべき点としては，確かに国際的視点というのは，この答申案に欠けている気がします。農業もそうですが，水産業ではグローバルな時代に入っていて，83～84年ぐらいから漁獲高は右肩下がりになってきていて，世界第6位の海岸線があり，資源量が豊富であるが漁獲高が下がっているというのはどこかに問題があるからだとおもいますし，国際的な漁業のシステムは，非常に速いテンポで変わってきています。そうしたことにポジティブにチャレンジしているのが水産学校の生徒だと思います。そうした観点から英語教育や産業教育なども含めて，国際的なセンスを養うことは重要であります。

もう一つの観点は，地域経済をどうするかということとは大きな課題があるのだらうと思います。どちらも家族経営でやっている中で，家族経営が持続可能なのかということを見ると，新たなチャレンジが必要だらうと思います。とはいえ、これまで産業教育が人材の供給源として果たしてきた役割が多いので，産業の方から考えるということとともに，教育の方から考えるということも答申案で強調していただくとありがたいと思います。

上野委員：ものづくりの立場からすると，グローバル人材の育成は間に合わないくらいであります。国際競争からすると，日本の役割が，企画をしたり，研究をしたり，開発・設計・試作などに特化してきます。そうした人の働く場は，日本が半分，海外が半分というのは当たり前のようになりつつあります。ものづくりに関心をもって技術を身に付けていくと同時に，働き方に夢を持つことが必要になってきます。大変素晴らしい志教育というのがありますので，志という夢の中には，日本を土台にしつつも，グローバルな視点，最終的には日本を拠点にどこでも働くことも大きな夢になることを願います。また，1次産業にしても6次産業という言い方をした場合，たとえば中国の富裕層は日

本の米や日本の魚を輸入したりしています。決して国内だけの産業ではないことを考えることになります。

大泉会長：日本全体にとっても大問題ですが、若い人たちは海外に出て行かなくなっています。他方で企業は海外展開をしなければなくなっています。寿司屋などは今や中国系のコンサル企業が多くなっています。日本は縮み志向みたいなのがあって、これからアジアの繁栄を考えると、地域経済のためになるということですが、(志教育一般はここで議論することではありませんが、)宮城県はアジアの中で、世界の中でどういう位置づけなのかの議論が必要な気がします。

本図委員：設置者の皆さんに特にお願いしたいところですが、高校に地域からの応援団とかファンができるように後方支援ができるようなことを考えて意識的に取り組んで欲しいと思います。方法としては、単純に学校の成果を広報することや、グローバルな観点で活躍している卒業生に生の言葉で語りかけてもらうという方法があると思います。もう一つは、作品や製品を売買し、県民や地域の方が買うということが励みになると思います。法律なども絡んで難しい面があると思いますが、支援していただいて、物や製品の売買も含めて、地域の応援団づくりの仕掛けをしていただければと思います。

大泉会長：若い方々が、復興市を主催するとかボランティア活動をするなど教育との接点はどうなのか、これからも防災教育なども含めたところが出てきます。あるいは被災地の復興・地域振興ということを考えて、学校教育と地域での活動がシームレスになって来ることが必要なのか、そういった可能性も少し考えておかなければならないと思いますので、そのような観点からの専門教育・専門高校の在り方も検討することも一つの観点として考えておく必要もあるかもしれません。

白石委員：本校は農業高校ですが、これまでは素材を単純に販売したりちょっとした加工したりして地元を提供してきましたが、もっとグローバルな形で農業そのものを楽しんでいただくという構想を前から持っています。グリーンツーリズムという中で、教科としてグリーンライフという科目があり、積極的にいろいろな方を学校に受け入れて農業の良さを楽しんでもらっているところです。さらに、震災前からもっと食べ物を楽しんでもらうというような、レストラン機能のようなものを是非作りたいという構想を持っています。農水省などは食の6次産業化ということで、ごく当たり前のように農家にパンフレットを配って、盛んにPRしているところですが、農業高校が農家がすることに遅れて何かをするというのは時代にそぐわないと思います。先ほどから話題にあがっている新たな学科の設置ということは本校は必要であって、是非このような機会に進めていきたいと考えています。しかし、震災ということからすると新しいことになかなか取り組めないというネックがあって、是非後押しするような書き方をお願いしたいと思います。

大泉会長：震災だからこそ新しいことをしなければならないと思いますが、いかがでしょうか？

白石委員：皆さんにそのようにおっしゃっていただいておりますが、現実的にはそれ乗り越えて財政的な支援を受けるというのは大変な事だと感じております。したがって、今回の中間答申を早く出していただいたことには感謝いたします。産業教育を推進するところは文科省ですが、建前ではわかりますが、財政的な支援を考えると時間がかかりすぎるのではないかと。できるだけ早く道すじをつけてもらうというのが大切であると思っております。

大泉会長：今の発言は大きなポイントを突いた意見だと思います。先ほど答申した3校は再建する際に、建物を再建するのは必要なことで優先課題として大切ですが、同時にここで議論している地域との関係、グローバルな視点などと関連した、新たな教育システムをそこで作れるかどうか、作りたいといった場合に可能なかどうか。旧来からの農業高校のようなものになってしまうのか？あるいはこれを契機に新たな農業教育にチャレンジできるのか？ここが大きな分かれ目としてあるよう思っています。ところが今は建物だけの話ですからそのようになっていないという、校長先生としての思いと現実との話だったと思います。新しい物を作りたいと思っております。

橋本委員：2つめの○で、学校間や異校種間連携とありますがとらえ方はどうですか？

事務局：学校間連携は高校同士の連携をイメージしております。異校種間連携は、高校と大学、高校と専門学校、高校と中学校というようなイメージです。

橋本委員：今の説明であれば専門学校に関わるものとして、良い考えであると思っております。専門学校の教員も活用していただければと思っております。

大泉会長：専門学校と専門高校との連携はどのようになっていますか？

橋本委員：一部あると聞いております。情報処理などで商業高校などとあるようです。相互交流とはなかなかいきませんが、プラスになればよいと思っております。

大泉会長：高大連携が近年盛んになってきていますが、大学側が学生募集という気持ちを持ちながら実施していますが、その場合は大学がイニシアチブをもってしているようで、あるいは高校の先生からオファーがあつて行われているようです。このような場合は予算措置があると上手くいきそうではありますが、連携は言うは易く行うは難しというところがありますが、中味についてはよろしいですね。

大泉会長：いろいろ意見をいただいたということで、この辺で終わりにしてよろしいでしょうか？

御意見がないようですから、御審議いただいた内容につきましては、専門委員会で次回までに最終答申案を再度調整していただいて、2月か3月に最終の審議会をして答申案にしたいと思っております。白石委員長、よろしく申し上げます。その他の事項何かありますか。

事務局：専門委員会で最終調整をしていただいて、次回の審議会は2月21日の火曜日を予定しております。

大泉会長：他に無ければ、審議を終わりたいと思っております。